フレッシュパーソン抱負を語る

自衛隊パイロットという未来

防衛省航空自衛隊
一般幹部候補生飛行要員　高岡　伽成

私は、2015年９月に大阪大学工学部環境エネルギー工学科を卒業致しました。そして2017年３月末より航空自衛隊幹部候補生飛行要員、つまりパイロット候補生として就労しております。この度は恩師の福田先生より機会を頂き、本誌へ寄稿させていただく運びとなりました。執筆時点では入隊前ゆえに社会人としての経験を踏まえての執筆はできませんでしたので、この進路を選ぶに至った過程なども含ませながら、フレッシュマンとしての抱負を述べたいと思います。

まず、なぜ航空自衛隊なのか？この職に就くことを伝えた同期の友人や昔馴染みは皆揃って驚きました(笑)　そりゃそうです、阪大卒なら大手の企業が選り取りみどりと言っても過言ではありませんから。もともと大学入学以前より科学技術の先端分野の一つである航空宇宙分野に携わりたいという思いがありました。卒業研究の折には量子システムデザイン工学領域において多成分多相流流体への数値解析的アプローチの一端の研究に携わっていました。原子力発電の高速増殖炉における事故予防のための定量的評価を目的としたものでしたが、所属していた学科の中でも航空機の設計や燃料機関の開発に役立てられる経験を得られるのではないか、といった思いのもと学勉に勤めておりました。しかしながら院への進学を控え人生を考えるようになって、エンジニアとして生計を立てたいとは思えず、何をしたいのかという面で深く悩むことになりました。結局大学院試を機に専攻を変えようとするも上手くいかず、半ば必要性に駆られて就職へ視野を広げる事となりました。そんな中、ある大手の航空関連企業とちょっとしたご縁を頂ける機会があり、その企業に注目して情報を収集する中で「目の良くない私にもパイロットになれる可能性がある」という事実を知ったのが、この進路に至る最初のきっかけでした。この時ほど「私がしたいのはこれだ！」と思えた職業はそれまでなく（むしろ何故今まで考えなかったのか不思議でした)、挑戦できる資格があることも知った私は、思い切って焦点を絞って目指すことにしました。今思えば納得できない気持ちを押し殺さずに悩み続けたからこそ得られた進路だと思います。

さて一概にパイロットといっても自衛隊だけではありません。自衛隊の他にも民間会社の正社員、また国営の学校の生徒として訓練を受ける進路があります。平成28年度、私はほぼ全ての採用または入学試験に挑戦いたしました。ここで最終的に自衛隊を選択したのには2つの理由があります。

１つは操縦士としての在り方です。民間で安全面・信頼性で高レベルな航行を追究していくよりも、国防や災害救助への使命感という他では負えない責任のもとで操縦技術をひたすら極めていく方が私にはずっと魅力的でした。実は試験の一環で、教官とともにT-7という航空機に搭乗し簡単な操縦をするＵＥ－Ｘという過程があります。センスや適性を判断される試験課程で、まるで豆腐を持っているかのような微力で実際に操縦桿を操作しながら、エンジンのパワー・機体姿勢・速度・高度などを同時並行的に処理することが求められます。正直試験は上手くいった気はしなかったのですが、高い要望に応えるだけの技術の鍛錬を何よりも追及できる環境にあるのはここしかないと確信しましたし、今後の訓練を心躍るほど楽しみにしております。

２つ目は何より、国家の存亡に直接的に関わる数少ない職業である点です。これまでの人生で自衛隊に関心を持つことはなかったので、どういった組織で職業理念なのか、等といった知識は欠落しておりました。が、ふと高校生時代の学友の縁から、自衛隊出身の政治家としてご活躍の佐藤正久先生や宇都隆史先生の御講演を拝聴する機会がありました。日本の国際的な現状と将来的不安を痛感し、国のため精力的に活動されている先生方には心動かされましたし、かの先生方と肩を並べて国という個人では支えきれないファクターの為に仕事がしたい、という想いに駆られました。他にも基地や防衛省等の見学においては配備中のPAC-3や救難隊など国防や災害救助の一端に触れる機会がございました。近頃憲法改正や沖縄基地問題の議論の紛糾に伴い平和の大切さが強く叫ばれる情勢でありますが、自衛隊を身近に感じるにつれて、この平和を恒久的に維持するために私自身も尽力したいとの想いが芽生えました。

以上が入隊に至る経緯でありますが、これらを踏まえた上で新社会人としての私の抱負は、執筆時点の入隊前の気持ちを初心とし、初志貫徹することです。上述の航空機、そして国家に対する責任への想いはもちろん、なにより人との繋がりに注意を払っていきたいと考えています。なぜなら進路を決意し、またその思いを確固たるものにした事象・過程は全て知人・恩人との縁に起因致します。多生の縁への感謝を忘れることなく、パイロットとして、国防を担う者として、職を全うできるよう精進していきたいと思います。

最後に結びと致しまして、この様な執筆の機会を与えてくださった恩師・福田先生に深く御礼申し上げます。

（環境エネルギー　平成27年卒）